



ブリュエゲルの「子供の遊戯」(13)

——西洋美術史にみられる「子供の遊戯」小史——

森 洋子

一九八一年五月号から一九八三年八月号まで、本誌において十二回にわたりブリュエゲルの「子供の遊戯」に描かれた91種類の遊戯を分析してきた。その後、ブリュエゲルのこの作品の絵画史上の位置づけを行うため、西洋美術史における子供の遊戯の小史を執筆したいと希望しつつ、約一年間も連載を中断してしまつた。漸く連載を再開できたが、このテーマがあまりにも大きく、単に美術史上の表現を探索するだけでは不十分で、遊戯思想史との係わりも十分考慮しなければ、この問題は論じら

れないと認識した。しかも遊戯思想史は筆者の専門領域外なので、本連載では問題提起に留まりながらも、できるだけその思想的背景も浮彫されるような一論を書いて、終結したいと思う。本号では古代ギリシャ、ローマからルネサンス(2)まで、次号ではルネサンス(3)——ブリュエゲルの「子供期へのまなざし」から十七世紀までの西洋美術史における子供の遊戯の小史を展望したい。なお私事にわたるが、この一年間の中断は筆者の資料収集の期間でもあつた。昨年八月、ウィーンでの国際美

術史学会に出席するため渡欧したが、前後五週間、ベルギー、オランダ、ドイツの図書館、美術館、美術史研究所で中世から近世にかけての子供の遊戯の図版や文献資料を収集した。とくに本連載でも度々引用し、図版を利用させていただいた *Kinderspeelen op tegels* (『タイルにみられる子供の遊戯』)の著者ヤン・プライス氏をオランダの北部ムッセルカナル村に訪問し、二日間彼の子供の遊戯のタイル・コレクションや古い玩具、その他老大な写真資料を見せていただき、研究討論を重ねたことは、筆者の研究の進展にひじょうに有益であった。誌上をお借りして、プライス氏のご好意に心からお礼を申し上げます。

古代ギリシア、ローマ——生々と遊ぶ子供

すでにプラトン (『法律』一の一六四三、七の七九四)^{注1} やアリストテレス (『政治学』七ノ十七)^{注2} は子供にとっての「遊び」をきわめて有益であるとみなしていた。プラトンは子供がその遊びの内容によって、すでに将来就く

べき職業の準備訓練ができる、と考えた。つまりもし子供が大人になりたければ、遊戯の中で小さな家を建てたり、また将来農夫を志すなら農耕の遊びをしなければならぬ。その場合、本物の道具の模倣物の小さな道具を与えなければならぬ。こうして遊びと学びを同時に行うべきだと述べている。

アリストテレスは子供が五歳になるまでは、学習や厳しい労苦に関与すべきではない、なぜならこの時期は大切な成長期であるため、身体が不活発になるのを防ぐためにも、遊びと運動に十分重点を置くべきだ、と主張した。こうした教育論を反映してか、とくに、ヘレニズム時代 (紀元前三二三年から紀元前三四年頃) には、スポーツをしたり動物と遊ぶ生々とした子供の姿が彫刻に表現されるようになった。例えば、「驚鳥と遊ぶ子供」(図1、2)、「くるみ遊び」(図3)である。これらの作例はギリシア彫刻史の中で初めてみられる子供らしい表情と身体プロポーションを示す造形表現である。

ローマ時代では石棺の浮彫に、赤児を抱いた大人が、

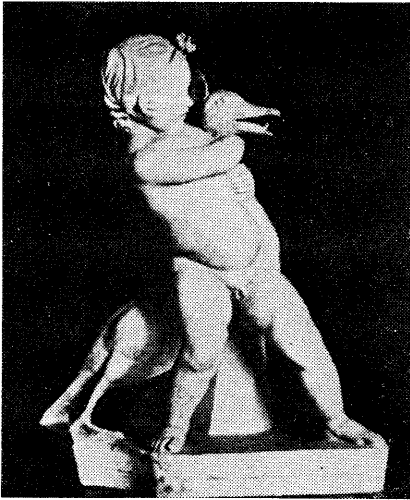


図 2 「鴛鳥と遊ぶ子供」 B. C. 280～240
ミュンヘン、古代彫刻館



図 1 「鴛鳥と遊ぶ子供」 B. C. 280～240
エフェソス美術館



図 4 「子供の教育」 ローマ時代
石棺の浮彫 ルーヴル美術館



図 3 「くるみ遊び」 B. C. 280～240
ローマ、国立古代彫刻美術館

馬車を駆る少年を訓練している情景がみられる（図4）。
実践を重んじたローマ時代に適わしい作例である。

中世——区別しにくい子供と大人の遊び

中世においてとくに注目すべき遊戯支持論は、一二五〇年頃のボーヴェのヴァンサンの『百科全書』である。

その一章「子供の教育」の中で、「もし子供が眠りから目覚めたら沐浴しなければならぬ。その後一時間は遊んでもよいだろう。それから食事をし、続いてもっと長い時間遊ぶべきである。その後再び沐浴し、^{注3} 食事をとる」とある。つまり子供は思う存分遊び、沐浴し、食事をす

るのが日課である、と述べていた。さらに一二七七―七九年のエギディウス・ロマヌスはアリストテレスに影響をうけ、こう論じた。「節度ある遊戯はとくに子供たちに適している。というのは遊戯の中に、適度な動きがあり、怠惰が避けられ、肉体的な運動性が要求されるからである。……子供にとって退屈さこそ堪えがたきものだから、秩序のある遊戯、信頼すべき、罪のない楽しみ

に親しむことは善きことである。」^{注4}

レーゲンスブルクの司教座聖堂参事会員であったコンラット・フォン・メーゲンベルクは『エコノミカ、家庭読本』（二三五二年）の「新鮮な空気での遊戯と運動」

の中でこう主張した。「子供は適当な遊戯と有益な運動に励み、新鮮な空気の中に身体を置かなければならない。子供の適当な遊戯とは人形遊び、木製玩具で歩き回ること、鏡をのぞくことなどである。というのは幼年時代はもっとも小さなことにも驚き、単純なことに満足する。

こうした遊戯で子供の心は喜び、血が沸き、精神は磨かれるのである。歩き回ると同時に手足を意味深く動かすことであり、全身が強くなり、志した力強さが経験されるのである」^{注5}。このようにコンラット・フォン・メーゲンベルクは子供が遊び、運動することのでいかに身体を丈夫にし、心が生々とするかを喚起していたのである。

こうした遊戯支持論が活発に展開されるにもかかわらず、中世美術の中で子供の姿を求めるのは容易ではない。子供が表現される主な画像といえば聖母の膝に抱か



図5 「11月、ゴルフ遊び」(写本『ブルゴーニュ公妃の時禱書』)
1460年頃



図6 「12月、雪玉遊び」(写本『ブルゴーニュ公妃の時禱書』) 1460年頃

れた幼児イエスであろう。しかし中世初期のイエスはヘレニズム的な幼児らしい形態ではなく、小型化した大人のそれであり、しかも世界の支配者としての威厳を示し、時には祝福のポーズをとる。ルネサンス以降になって初めて聖母に抱かれた幼児イエスが子供らしさを全身に表わし、聖母に甘えたり、膝の上ではしゃいだりする姿が見られる。さらに聖母に見守られながら同じく幼い頃の従兄のヨハネと遊び戯われるのは、「マドンナの画家」といわれるラファエルを待たねばならない。彼での裸体のイエスとヨハネは時には、一見玩具を思わせる真鶉(元来は受難の象徴)をもって互いに楽しげに戯れている。

ゆえに中世美術で遊戯する子供の図像となると、その作例は豊富に見出されるわけではない。十三・四世紀の種々の写本の余白彩飾などに「遊戯」を見出し、はたして大人なのか子供なのか判別できない。さらに当時、子供といってもそれは「小さな大人」「大人の未成熟状態」であり、「身体的に大人と見做されるとすぐに、



図7 プリュージェル「弓術試合」(「ホボケンの緑日」の部分) 1559年頃銅版画

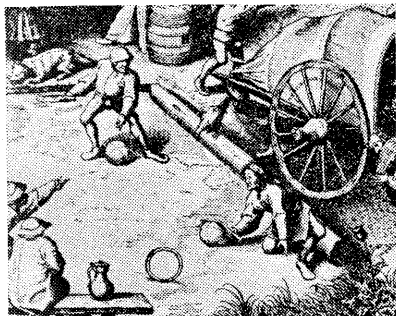


図8 プリュージェル「打球戯」(「シント・ヨリスの緑日」の部分) 1561年頃銅版画

できる限り早い時期から子供は大人たちと一緒にされ、仕事や遊びを共にしたのである。^{注6}十八世紀頃まで、子供はかなり早くから労働の担手、家計を稼ぎ出す働き手と考えられていた。^{注7}しかも中世において「遊戯」は決して子供の特権ではなく、アリエスも指摘するように、「大人たちは今日子供のものとされている遊びで遊んでいた」^{注8}のである。一四六〇年頃に制作された『ブルゴニユ公妃の時禱書』をみると、各月とも二ページからなる余白の月曆表現では農民の各月の野良仕事とともに、時には貴人の男女の楽しい遊戯が展開している。しかも二月と十一月の「ゴルフ遊び」(図5)、十二月の「雪玉遊び」(図6)は、大英博物館所蔵や後述のミュンヘン州立図書館所蔵の十六世紀前半のフランドルの時禱書の余白彩飾の「子供の遊戯」と全く同一の図像(図39)である。プリュージェルの版画「ホボケンの緑日」や「シント・ヨリスの緑日」をみても、弓術試合(図7)や打球戯(図8)をしているのは大人たちである。しかし時禱書にもみられるように、弓術ごっこは子供の人気スポ

1ツのひとつでもあった(図27)。この点は服装も同じで、少年と少女の間に服装の相違がないと同様、大人と子供も十七世紀になるまでほとんど識別できない同じ服装だったことを想起すると、興味深い。

しかし盛期ゴシック時代となると、前述の中世の思想家たちが子供の遊戯の意義を認めているように、造形表現の中で思いがけない場所に子供の遊戯が見出される。

それも教会の正面の薄肉浮彫とか写本の主要挿絵という「正」の場ではなく、隠されたり、二次的な役割しかもたない「負」の場所、例えば教会内陣にあるミゼリコルディア(後述)や写本の余白といったそれ自体「遊びの空間」に見出されるのである。例えば十三世紀後半から十四世紀前半の時禱書や詩篇といった祈禱用の写本、また『アレキサンダー大王物語』や『鷹狩りの書』のような世俗的な内容の写本など、聖俗にかかわらず、その余白に大人の遊戯とも子供のそれとも見分けのつけられない各種の遊びが描写されている。写本の余白は細密画家のかなり恣意的な自由が許されている場であるが、彼ら

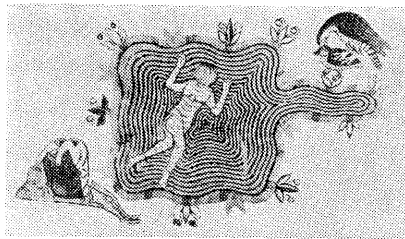


図9 「水泳」(フランスの写本『鷹狩りの書』) 13世紀後半 パリ国立図書館 MS fr. 12400

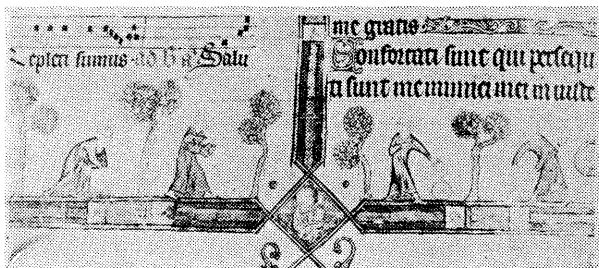


図10 「ボール遊び」(フランス・フランドルの写本『マルガレーテ・ボージュの時禱書』) 1318年以後 ロンドン 大英博物館

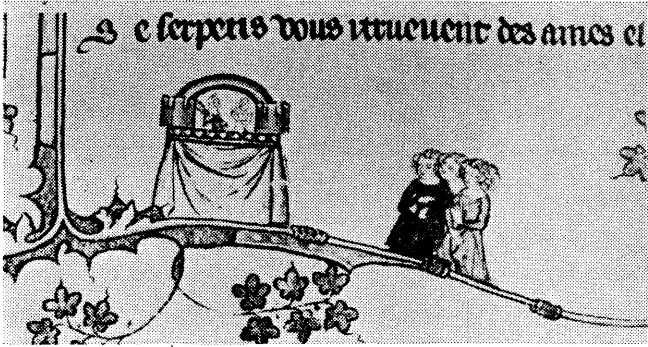


図 11 「人形芝居」(フランドルの写本『アレキサンダー大王物語』) 1338—1344年
 オックスフォード ボードレイアン図書館 Ms. Bodrey 264

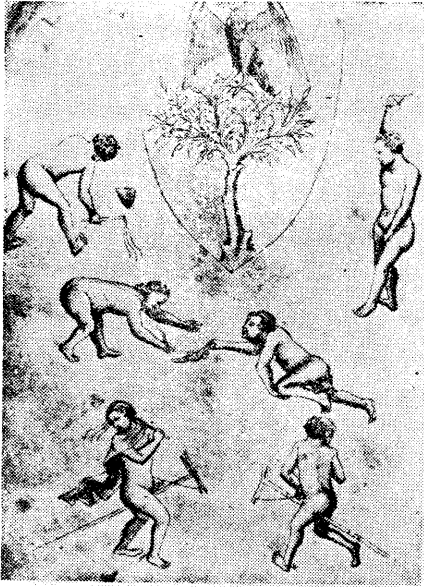


図 13 「子供の遊戯」(ロンバルディアの『画帖』) 14世紀 ニューヨーク ピ
 エボン・モルガン図書館



図 12 「鞭独楽回し」(図9と同じ)



図 15 「歩行器の子供」 ミゼリコルディア
1478年頃 ブュージュ サルヴァートル聖堂



図 14 ジャン・ド・ヴァレンシエンヌ
「目隠し鬼ごっこ」14世紀末
柱頭彫刻石 ブリュージュ市庁舎

が子供の遊戯に対してある程度の観察のまなざしをもっていたことは注目に価する。例えば「水泳」(図9)では全裸の青年が四角い池で泳ぎを楽しみ、その近くに脱いだ衣服が重ねられている。「ボール遊び」(図10)ではローブを着た二人の青年が組になり頭部大のボールを転がしている。しかし、「人形芝居」(図11)(おそらく指人形であろうか)を観劇しているのは子供たちであり、「鞭独楽回し」(図12)で二本の紐を棒にしぼり、独楽を打っているのもおそらく子供と考えてよいだろう。ほかに十四世紀のロンバルディアの画帖(図13)では、鞭独楽や捧馬などに興じている六人の裸の人物たちが描かれているが、その一寸とした表情や身体の動かし方から遊戯しているのは子供とみなしてよいだろう。また同じく十四世紀のフランスの象牙浮彫に「熱い手と蛙遊び」が表現されている。前者はブリューゲルの「子供の遊戯」のNo.28の「牡山羊、牡山羊よ、しっかり立て」の古いヴァリエーションのひとつであろう。顔を隠した子供の背中に手を触れた仲間の名前を云い当てる遊びである。ま

た十四世紀前半、ブリュージュで活躍したジャン・ド・ヴァレンシエンヌの手による同市の市庁舎の柱頭にも、「目隠し鬼ごっこ」(図14)の三人の子供の姿が見出される。破損がはげしいので分かりにくいのが、両手を胸にあてている真中の子供が鬼の役をしているのだらう。

聖宮内の内陣に聖職者の坐る祈禱席がある。その坐部の裏側にはミゼリコルディアとよばれる木彫の突起裝飾が施されている。それは聖職者がミサの間、立ちながらも、折りたたみ式の座席を立てて、その上に、軽く腰を支える部分なのだが(ゆえに「神の慈悲」の意のミゼリコルディアと呼称される)、そのため思いがけない世俗的な主題——動物寓話、伝説、諺、社会諷刺、月々の農事、職業——などが表現されている。その中にはレスリンド、捧馬に乗っての槍試合があるが、興じているのは大人たちである。子供が表現されているのは、寺小屋で学んでいる子供とか歩行器で歩く練習をする子供(図15)で、比較的遊ぶ子供の姿は少ない。例外的にブリュージュの「目隠し鬼ごっこ」を思わせる三人の少女の姿がみられ

る。とくに十六世紀前半のフランドルのミゼリコルディアは、諺や悪習への諷刺、民衆の生活実景を表わしている点で、ブリュージュの主題の「源泉」として今後、遊戯の面でも注目されねばならない。

十五世紀後半以降、木版画や銅版画が普及し、子供の遊戯を独立した主題として表わした作例がかなり見られるようになる。南ドイツで活躍したbgのモノグラムの画家は二人の童子が野原で宙返りをしたり、レスリングをしている銅版画を制作した。ロンバルディアの画帖と違って、ここでは童子の身体も動作も幼さにあふれ、この画家がたとえイタリアへ旅しなくても同時代のイタリアの大理石彫刻、例えばドナテルロの「遊ぶプットー」(一四三三―三八年)などを間接的に知っていたのではないか、と思われる。

また同じくドイツの銅版画イスラエル・ヴァン・メックケムはbgのモノグラムの画家よりも、はるかに集約的に子供の遊戯を同一正面に描き込み、そこには文字遊び、捧馬、水遊びなどがある(図16)。注目すべきは同じ画家

の手による銅版画「聖母子と鐘」(図17)で、聖母の膝の上の幼子イエスは、ハンマーをままるで玩具のようにして天使の支える鐘を打っているが、右脇のドメニコ会(あるいはカプチン会)修道士の存在からイエスの行動は聖務日課を伝えているのである。おそらくこれは金工細工



図 16 イスラエル・ヴァン・メッケネム「子供の遊び」
1490年頃 銅版画

師用の聖牌か聖遺物匣のためのデザインとして作成されたのである。



図 17 イスラエル・ヴァン・メッケネム「聖母子と鐘」
1490年頃 銅版画

ルネサンス(1)——時禱書に彩飾された十二カ月の子供の遊戯

十六世紀になるとブリュージュで大量に制作された時禱書のいくつかは、十二カ月の月曆ページの上部ないし下部の余白を、季節に関連した内容もふくめて子供の遊戯で彩飾した作例がある。時禱書の余白がこうした子供の遊戯で彩飾されることは決してポピュラーだったので

はないが、筆者の知るかぎり、大英博物館所蔵の通称『ゴルフの書』または『カルル五世の祈禱書』(BM ms. Add. 24098)・アントウェルパンのマイヤー・ヴァン・デン・ベルフ美術館の Ms. 946、またこの時禱書に図像的、様式的にも類縁関係を示す一九七六年に発見された通称『スピニョラの時禱書』(現在ピーター・ルートヴィヒ博士所蔵)、ミュンヘン州立図書館の Cod. lat. 28346 が挙げられる。これらはいずれも一五二〇年―二〇年代にブリュージュでホーレンバウトないしベニングの工房で制作された。聖人祝祭日の暦表の余白を、とくに子供の遊戯で装飾した動機は、例えば、『ゴルフの書』(ゴルフの前身でオランダ語でコルヴェンといわれる遊びが描かれているので、こう通称されるようになった)がカルル五世がまだ幼いプリンスを喜ばせるための「贈物」として注文されたことから、これらの写本の所蔵者の年齢とは何らかの関連があるのだろう。これらの作例の中で、ミュンヘン州立図書館のホルトゥルス・アニマエの画家の時禱書は各月とも左右二ページにわたって上部余

白に同種類もしくは数種の子供の遊戯が彩飾されている好例である(図18~41)。

- | | | |
|------|---------------|-------|
| 一月*左 | 樽櫃に乗ってのトーナメント | (図18) |
| 右 | 右同 | (図19) |
| 二月*左 | 輪回し | (図20) |
| 右 | 右同 | (図21) |
| 三月 | 盲人の鍋たたき、鞭独楽回し | (図22) |
| *右 | カタカタ鳴らし | (図23) |
| 四月*左 | ボール入れ | (図24) |
| 右 | シャボン玉 | (図25) |
| 五月*左 | 五月の樹と女王 | (図26) |
| 右 | 弓術大会 | (図27) |
| 六月*左 | 棒馬に乗っての槍合戦 | (図28) |
| 右 | 右同 | (図29) |
| 七月 | 歩行器 | (図30) |
| *右 | 小鳥や蝶々を飛ばす | (図31) |
| 八月*左 | ポートでの水合戦 | (図32) |
| 右 | 右同 | (図33) |
| 九月 | ボールを穴に入れる | (図34) |
| 右 | 指骨遊び、喧嘩 | (図35) |
| 十月*左 | 指骨遊び | (図36) |
| 右 | 小鳥を飛ばす | (図37) |



図 18 「一月、樽橋に乗ってのトーナメント」



図 19 「一月、左同」



図 20 「二月、輪回し」

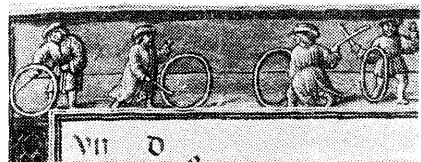


図 21 「二月、左同」



図 22 「三月、盲人の鍋たたき、鞭独楽回し」



図 23 「三月、カタカタ鳴らし」



図 24 「四月、ボール入れ」



図 25 「四月、シャボン玉」



図 26 「五月、五月の樹と女王」

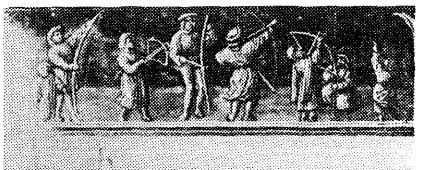


図 27 「五月、弓術大会」



図 28 「六月、棒馬に乗っての槍合戦」



図 29 「六月、左同」



図 30 「七月，歩行器」



図 31 「七月，小鳥や蝶を飛ばす」



図 32 「八月，ボートでの水合戦」



図 33 「八月，左同」



図 34 「九月，ボールを穴に入れる」



図 35 「九月，指骨遊び，髪むしり」



図 36 「十月，指骨遊び」



図 37 「十月，小鳥を飛ばす」



図 38 「十一月，髪むしり，竹馬」



図 39 「十一月，コルヴェン(ゴルフ)遊び」



図 40 「十二月，雪像」

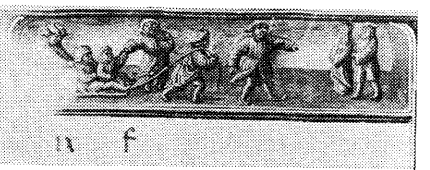


図 41 「十二月，櫓すべり」

十一月 左 髪むしり、竹馬

(図 38)

* 右 コルヴェン

(図 39)

十二月 左 雪像

(図 40)

* 右 櫛すべり

(図 41)

以上の月曆にみられる子供の遊戯で * 印のつけたものは、他の時禱書にも共通した種類である。ということは一ひとつの手法を踏襲して他の写本が制作された可能性もあり、また、一月の樽櫛り、五月の五月樹メイ・トリス、八月の水合戦、十二月の櫛すべりなど季節的な遊戯として、すでに伝統が出来上がった場合も考えられる。これらのヴァラエティーに富んだ遊戯はブリュッゲルの「子供の遊戯」にとってひじょうに重要な先行例である。

ルネサンス(2)——人生の第一時期「幼年期」のアレゴリー

ルネサンス時代で、つぎに注目すべき「玩具をもつ子供」の作例は、「人生の諸段階」の幼年期のアレゴリーに見出せる。レイモント・ヴァン・マルルによれば、

「人間の生涯」のアレゴリーはローマのサンタ・マリア・

イン・コスメディン聖堂の浮彫(一世紀頃)にまで溯源できるといふ。しかしここでは十字架の囲りで水を飲む孔雀の図像であった。そこで実際に人生を諸時期に区分する中世後期からルネサンス期のアレゴリー表現の直接の先行例のひとつとして、十二世紀のバルマ大聖堂の洗礼堂にあるアンテラーミの浮彫に溯源できる。これはマタイ伝(二十章一節以下)を典拠とする葡萄園の労働者の寓話と関連させている。注10 しかも木・銅版画が普及しはじめた十五世紀後半から、人生の諸時期はもっと明白な形で描写されるようになった。その区分のしかたは種々あるが、もっともポピュラーなもののひとつは、人間の一生を六年ずつ十二時期に分け、黄道十二宮や十二月の月曆と組合せたりする。図42のように単に各時期を並列的に描いたり、図43のように左下から上昇し、右下へ下降するという階段形式の図像を表わすこともある。アリエスの引用する十四世紀の詩は「幼年期」をこう譬えている。

「人、この世に生れ、過せる初の六年、



図 42 吹流しの画家「人生の10時期」15世紀末 ネーデルラント 銅版画



図 43 ヨルク・プロイ「人生の9時期」1530年 銅版画



図 44 ヘラルト・P・ヴァン・フロニンゲン「幼年期」(「人生の10時期」より)16世紀中期 銅版画

われらまさしく一月に、譬う。

この月に、徳はなおい力を欠き、

六歳なりし子供は、等しき故なり。^{註11}

十六世紀にはさらに七惑星と組合わせた七時期の区分とか空気、水、火、土、の四大や四季とともに幼年、青年、壮年、老人の四時期に区分する画像形式も流行する。いずれにせよ、最初の「幼年期」として産衣にくるまった播藍の中の赤児を示す場合もあるが、大半は歩行器、棒馬、人形、独楽などの玩具を手にする幼児である。しかも各時期に相応しい象徴的動物と組合わせるとき、「幼児期」は小豚(生まれたての小豚は赤児のように丸々として、肌もピンク色でやわらかい)、犬、仔山羊(ピョンピョンと元気に走り回わる)などが足元に置かれている。十六世紀中頃になると、「幼年期」「青年期」「中年期」「老年期」の四点一組の寓意版画が一層愛好されるが、その最初の時期に初めて、ブリュッゲルの作品にもっとも近い、広場で種々の遊戯に夢中になっている沢山の子供の姿が描かれるようになる。^{註12}



図 45 マルテン・ド・ヴォス 下絵「幼年期」
1560年以降 銅版画

の直後に成立したマルテン・ド・ヴォスの「幼年期」だが、四十数人の子供が独楽回し、輪回し、牡山羊遊び、目隠し鬼ごっこ、竹馬、かごめかごめに似た輪舞など八種類の遊びに興じている。余白にはフロニンゲンと同じ銘文のラテン語とフランス語、さらにつきぎのオランダ語の銘文が記されていた。

「十歳という年齢が
わたしたちの年の数。

十六世紀中頃の図44のヘラルト・P・ヴァン・フロニンゲンの下絵をみると、幼年期を一歳から十歳までとし、中央には「カリタス」(慈愛)の寓意像を思わせる婦人が乳児に母乳を与え、他方で学齢期の子供に文字を教えている。他に野原で打球戯、輪回し、シャボン玉遊び(?)などの遊戯もみられる。下の余白にはこう記さ

れている。
「喋り始めたばかり、
土の上に歩き始めたばかりの子供は
はしゃいで歓喜している」(ラテン語)
「この若くて可愛い年齢、
遊ぶ楽しみは重大だ」(フランス語)

図45はおそらくブリュッゲルの作品

られるが、ここにもフーニンゲンやド・ヴォスに使用
 このド・ヴォスの影響をうけた版画として図46が挙げ

だからわたしたちのことは
 貴方には馬鹿げたように思われるでしょう。
 そして子供の遊びとみなすでしょう。
 だが、わたしたちの目には楽しいのだ。
 わたしたちは打ち、棒を引っ張り、
 独楽を回し、体の上を跳び、輪をころがす。
 他の遊びもみな子供の大騒ぎだ。」



▲ 46 マルテン・ド・ヴォス「幼年期」
 16世紀後半 銅版

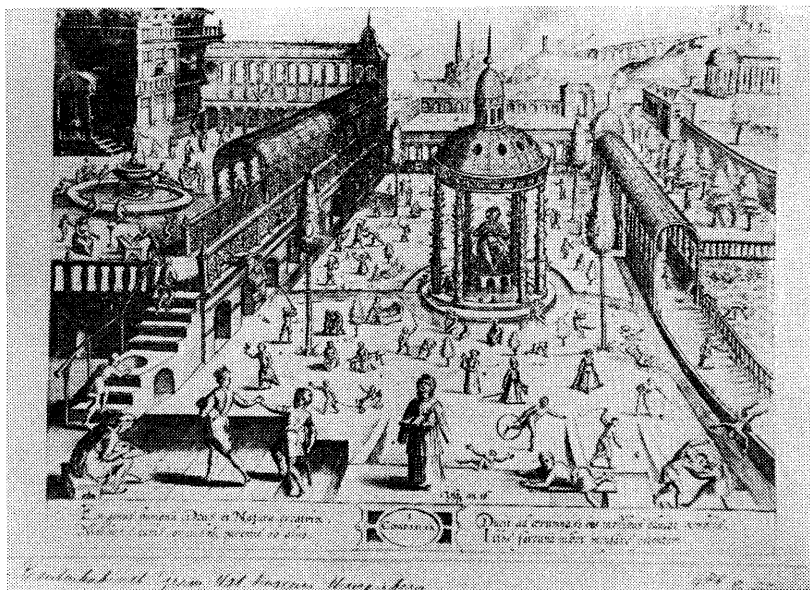


図 47 ウィーリックス「人生劇場」1577年 銅版画



図 48 マルテン・ド・ヴォス (?) 下絵「幼年期」
16世紀後半 銅版画

ている。他にも図48の「幼年期」、図49の「月」と組合わさった図像など、遊ぶ子供の作例は決して少なくなかった。^{注13}

注1 プラトン『法律』（『プラトン全集』山本光雄訳 角川書店 昭和四十九年）一ノ六四三、七ノ七九四

注2 アリストテレス『政治学』（『アリストテレス全集』15 政治学 山本光雄訳 岩波書店 昭和四十四年）七ノ十六

注3 Vinzenz von Beauvais, *Speculum Doctrinale*, 45 Klaus Arnold, *Kind und Gesellschaft in Mittelalter und Renaissance*, Paderborn 1980, p. 116 に掲載。以下、注4

45は同書の巻末資料を翻訳した。

注4 Aegidius Romanus, *De regimine principum*, Arnold, *ibid.*, p. 124.

注5 Konrad von Megenberg, *Yconomica*, Arnold, *ibid.*, p. 140.

注6 フィリップ・アリエス『子供』の誕生』（杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房 昭和五十五年）一頁。

注7 十八世紀の子供の労働状況については Derek Jarrett, *England in the age of Hogarth*, St. Albans 1976, pp.

された同じラテン語のテキストが見出される。

さらに一五七〇年から八〇年にかけて、人生諸時期の寓意版画の構図はより複雑化し、絵画性に富む。図47はウィーリックスの「人生劇場」であるが、庭園の中央の円形の亭には「自然」の寓意像の噴水が両乳房から水をぶき上げている。その周辺には無数の子供が遊びを楽しん



図 49 マルテン・ド・ヴォス下絵「月」
 (「七つの惑星」より) 1581年 銅版画

注 11 アリエス、前掲書、二十四頁。

注 12 E. Tietze-Conrat, "Pieter Bruegels Kinderspiele", *Und heidnischig Jahrbuch*, 1933, pp. 127~130.

注 13 Tietze-Conrat, *ibid.*, p. 130.

(明治大学)

注 8 アリエス、前掲書、六十九頁。

注 9 この「遊びの空間」に関して、筆者のつぎの拙論を参照されたい。「中世美術のリアリズムについての一試論」『東京工芸大学紀要』昭和五十七年、第五卷第二号、九頁~七四頁。

注 10 Raimond van Marle, *Iconographie de l'Art Profane*, Tome II, p. 153.